
シキンドウ

利木 糸会

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シキンドウ

【Nコード】

N8096J

【作者名】

利木 糸会

【あらすじ】

父が今際の時に告げた、史上最低の遺言。「うちは代々、《自殺見届け屋》の家系なんだ——！？

届睦に託されたのは、自殺志願者養護施設《紫菫堂》。その裏の顔は《集め屋》《薬屋》《代筆屋》《運び屋》《護人》、そして《見届け屋》から成る、自殺幫助組織《死近道》！！

「頼む」って言われても、俺にはこんなの無理だってバカ親父！

シリアスあり、コメディーありの平凡学生奮闘記（？）届睦は無事に遺言を守ることができるのか——！？

01「20年目の決意」

届睦ゆきちかは、拳を握り締めた。
強く、強く。

そうしていないと、今にも涙が零れそうだった。

二〇年前、母が死んだ。
自分が、生まれたせいで。

そして今、父が死のうとしている。
自分の、目の前で。

「……届睦」

届相ゆきはるは、重たい瞼を開けた。
ゆっくり、ゆっくり。
そうしないと、今にも命が尽きそうだった。

二〇年前、妻を亡くした。
息子を産んだ直後の、自殺だった。

そして今、自分が死のうとしている。
息子の、目の前で。

「父さん……」

そっと握ってくれた息子の手は、いつの間にか、父のものよりも

大きくなっていた。

病床においては、尚更大きく感じた。
その成長を、誇らしくも、少し寂しくも思う。

「大きくなったなあ」

伝えなければならないのは、そんなことではないのに、つい口にしてしまう。

男手一つで子を育てるのは、やはり楽ではなかった。

料理も洗濯も掃除も、全て己の分しかできなかった届相にとって、妻の死は、まさに死活問題であった。

自分一人のことならば、何とでもできる。

レトルト食品や外食が続こうが、洗濯物が二週間分溜まるうが、部屋が足の踏み場もない物置になるうが、彼自身には全く支障がない。

ところが、生まれたばかりの届睦を置いていかれては、状況が違ってくる。

栄養のある食事を作るだけでなく、食べさせてやらなければいけない。何かと服にこぼしては汚すので、洗っても洗ってもきりがない。落ちている物をすぐに口に運ぶし、埃を吸い込んで咳込むので、部屋も綺麗に保たなければならなかった。

おまけに、朝から晩まで気がふれたように泣き喚く。

——無理だ。

こっちの気が狂いそうだった。

施設に預けようか、それとも、いつそ心中でもしてやろうか。

黒い葛藤が、毎日彼の頭で繰り広げられていた。

それでも、無事に成人まで育て上げることができたのは、妻の遺言があつたからだつた。

《届睦を、頼みます》

二〇年前のあの日、妻は病院へ駆け付けた届相に、そう言い残して逝つた。

伝えるまでは、と、命をギリギリの所で繋いでいてくれたような気がしている。

——俺は、君を守れなかった。

ならば、せめて、遺言だけは守らなければ。

届睦が、まっすぐ利発な子に育ってくれたというのもあるが、彼女の言葉がなければ、自分も息子も、現在のカタチにはなっていなかっただろう。

それに比べて、自分が遺す言葉は、息子に絶望の淵に突き落とすかもしれない。

二〇年間伝えることもできず、遺すことも躊躇われる事実。
彼自身も、それに絶望したことがあった。

だが、今は違う。

——気付けよ、屈睦。

信じてるからな。

01「20年目の決意」(後書き)

始めました「シキンドウ」(*^^)

テーマが割と重めなので、逆に明るいテンションでいこうと思っています。

一話、二話辺りは導入部で真面目くさっていますが、そのうち壊れだすことでしょう(笑)

お付き合いよろしくお願い致します!(^^)ノ

02「親の心、子知らず」

「お前に、伝えなければならぬことがある。よく、聞け」

体中から最期の力を掻き集めて、届相は息子の手を握り返す。

父の手を握り直し、不安げな目をする届睦は、まだ間違いなく「子供」だった。

いくら手が大きくなろうとも、成人式を迎えようとも、変わらない。
い。

小さな頃から変わらない、愛しい息子。

「ごめんな、届睦。父さん頑張ったんだ。お前に頼まなくてもいいように、頑張って代わり探したんだよ。でも、見つからなかったんだ」

「いいよ、父さん。なに？」

「ごめんな、ごめんな」

伝えると決心してもなお、躊躇いがしがみついてくる。

言葉は出てこなくせに、涙が溢れ出てきた。

「後のことは、壮護そつごと美護みごに任せてある。二人を頼りなさい」
違う、これじゃない。

早く言わなければ、命が尽きる――。

それは、何人もの最期を看取ってきた彼にわかる、いわば勘であ

った。

「屈睦、頼むぞ。お前にならできる」

「……」

屈睦は無言であつた。

確実に死へと向かいつつある父の手をしっかりと握り、眼を見据える。

その眼は、涙に濡れてはいなかった。

その姿に幾分か安堵を覚えて、屈相は詰まっていた言葉を吐き出した。

「深見は、代々《自殺見届け屋》の家系だ」

「俺で三五代目、お前が三六代目になる。そして《シキンドウ》を治めるのも、《見届け屋》の役目」

力強く握られていたはずの手が、解放されてゆく。

屈睦の力が緩んだのか、屈相の感覚が失われていつているのかはわからなかった。あるいは、両方かもしれない。

「黙っていてすまない、屈睦。でも、頼む」

もう、目が見えない。

むしろ、好都合だった。

息子がどんな顔をして聞いているのか、知るのは怖過ぎる。

「わかったよ、父さん。安心して任せて」

予想に反して、屈睦は至極穏やかな声であった。

応えるように、屈相は穏やかに笑んだ。

「……逝ったか？」

屈睦が振り向くと、襖から壮護が半身を覗かせていた。父子の最期の時を邪魔するまいと、隠れていたのだろう。

大柄な彼の繊細な気遣いが、少しおかしくて、とても暖かった。

頷いて返すと、部屋に上がってくる。

屈睦の隣にどっしりと腰を下ろし、屈相の死に顔をじっと見つめた。

悲しみの色は窺えない。だが、思う所は、屈睦以上にあるはずだ。わかっているが故に、その様を静かに見守った。

壮護は屈相の幼馴染であり、ほぼ兄弟同然に育った間柄だった。だからこそ、息子を彼に託したのである。

亡骸の胸に手を当て、聞きとれない程小さな声で、何かを呟いた。

恐らく、「お疲れさん」と。

「届相は、『シキンドウ』のことは言っていたか？」

取り出したハンカチで親友の顔を覆いながら、問う。

届睦の方は、見なかった。

「なに、父さん、壮護さんにまでそんなこと言ってたの？」

フツと、堪え切れない笑いを洩らす。

壮護は、怪訝な顔で届睦を見た。

「何がおかしい？」

届睦も、同じ表情で見返す。

「何かおかしい？」

「遊んでる場合か」

「別に、ふざけてるわけじゃないよ」

「……届相は、どこまで話した？」

「どこも何も……。深見家が『自殺見届け屋』だとか、『シキンドウ』を治めるのが役目とか。びっくりしたよ。そこまで病気、悪かったんだね」

ハンカチで顔を隠され、見るからに「死人」と化した父を見て、思わず溜息が出る。ついでに、少しだけ涙も。

「届睦、あのな」

「痴呆だつてわかってれば、もっと傍にいてあげたのに……。俺の前じゃ平気な振りして、父さん……」

「お、おい」

「母さんの自殺、やっぱり引きずってたんだ。《自殺見届け屋》だなんて、変なうわ言を言ってる」

「屈睦！」

いきなり両肩を掴まれ、屈睦はビクッと身体を震わせた。

身体も顔も厳つい壮護に詰め寄られては、大の男でも身が竦む。屈睦の防衛本能が働いて、無意識に距離を取ろうと後ずさる。が、がっしり肩を掴まれていては、そんな努力は無意味であった。

壮護のことは父のように慕っているが、一つ文句をつけるとすれば、この脅しがかった話し方だろう。幼い頃は、よく泣かされたものだ。

「壮護さん？」

「あんな、屈睦、よく聞け」

正面から睨みつけられて、悪いことをした覚えはないのに、反射的に「すみません」と謝ってしまう。

いや、屈睦に自覚がないだけで、彼は謝罪に値する罪を犯していた。

「屈相のことは信じているか？」

「は？ まあ、父親ですし」

「俺のことは？ 信じられるか？」

「はい。……あの、一体？」

「そうか。お前の信頼する父親と俺が言うんだから、信じるよ」

「だから、一体何ですか」

「《シキンドウ》も、《見届け屋》のことも、うわ言なんかじゃない。事実だ。そして俺は、《見届け屋》の護衛を務める《護人》だよ」

届睦の犯した罪。

父が決死の思いで告げた遺言を、病人のうわ言として流そうとしていたのだ。

それを反省したい気はある。嘘ではない。

だが、する気になれないのは何故だろうか。

理由は簡単。

「有り得ねえ……」

ということだ。

02「親の心、子知らず」（後書き）

出ました、史上最低の遺言。

果たして届陸は、三六代目《見届け屋》を継ぐことができるのか？
ここから、彼の受難と奮闘が始まりますっ。

03「影の努力」

屈睦ゆきちかと壮護そうご、二人の間に苦い空気が流れているのは、隣に横たわる遺体のせいではない。

父に託されてしまった、《シキンドウ》なるモノと《自殺見届け屋》という家業。

病の上のうわ言と片付けてしまいたかったが、どうやらそういうわけにはいかないらしい。

屈睦の知る限り、壮護は「馬鹿」を付けても良い程に、正直な人間だった。というか、不器用過ぎて嘘が吐けない。屈相ゆきはるにしても、同様であった。

この世で一番信頼していた父と、その次に信頼している壮護に揃って言われたのでは、否定する術などなかった。

理性はそう結論付けていても、心が尚も否定しようと足掻く。

屈睦は、また拳を握り締めて深く俯いた。

「戸惑うのも、無理はない。俺達とは違って、ずっと《シキンドウ》から離れて暮らしていたからな。」

だが、長である屈相がいなくなった今、組織をまとめる役目は息子のお前にあるんだ。

その、何だ。

母親のこともあるし、できれば屈睦には背負わせないように、アイツも努力してはいたんだ。

でも、な。

直系の血縁者以外に家業を継がすのは、難しいことなんだよ。

特に《見届け屋》は長の一族だから、簡単に余所者へ任すわけにはいかんだ。

屈相もそれはわかっていたんだが……。

あまりにも、お前に継がすのは不憫だと、そう言ってな。

妻を自殺で失くして、息子には継がせられない。

他の奴らからだいぶ叩かれて、アイツ自身の立場も危うかった。

けど、それでも、頑張ってたよ、お前を守る為に。

結果的に実らなかったが、屈相の気持ちもわかってやってくれ。

ああ、すまん、何を言いたいのかわからなくなってきた」

不器用な彼なりに、途切れがちではあったが、懸命に真実を伝えようとしていた。

その懸命さが、逆に届睦の胸を刺す。
背負わされたモノが何なのかもわからないのに、やたらと重いのだろうという察しだけは付いた。

全て撥ね退けて、誰からも遠ざかっていたい衝動と、理性が身体の中で激しく衝突している。行き場のない、悲しみや怒り、疑問、負の感情が渦を巻いて、心が破裂しそうだった。

ぽつり、ぽつり。

逃げ出すことも、恐らくできただろう。できただろうが、できなかった。

そんな自分が悔しくて、情けなくて、ついに涙の堰が切れる。

「届睦……」

それだけ口にして、壮護は黙り込んだ。

沈黙が、彼に許された唯一の慰めであった。

「父さん、届睦ッ！」

慰めの沈黙を突き破る、ど派手な足音と声が近付いて来る。

襖が壊れんばかりの勢いで突入してきたのは、壮護の娘である美^み護^{もり}だった。

一つ年上の美護は、届睦にとっては姉のようであり、また、母親代わりでもある。小さな頃からどうにも頭が上がりず、尻に敷かれっぱなしだ。

肩で息をする美護は、振り乱された長い黒髪が白雪の肌を縁取り、壮護とは違う迫力を纏っていた。

「両手両足を縛りあげて、黙らせておけば美人」とは、届睦の言葉である。ただ黙っているだけでは、まだマイナスなのだという。

要は、行動に問題大アリ、ということだ。

今も、湿っぽい空気を爽快なまでに無視し、派手なご登場をしてくれた。

そして、彼女の派手な行動は続く。

03「影の努力」（後書き）

次回、台風娘「美護」が大暴れ？

というか、死亡の判断を下せるのは医師だけなので、そういった場合は勝手に話を進めたりせず、速やかに医療機関にご連絡下さい
良い子は放置しないようにね！

04「台風娘来襲」

届相^{ゆきはる}には目もくれず、父親譲りの鋭い眼光で届睦^{ゆきちか}を射抜く。

「届睦あ！」

「は、はい！」

返事をした瞬間、身体が浮いて世界が反転した。口の端を引きつらせた、逆さまの壮護^{そうご}が一瞬映り、気付いた時にはもう視界から消えている。

彼女の得意技、背負い投げが綺麗に決まった。

届睦の身体が見事な弧を描き、次いで畳に叩きつけられる。身長も体格の面でも幾らか彼の方が勝っているのだが、美護^{みもり}にはその程度はハンデの内に入らない。

護衛役である《護人》一族の彼女は、当然の如く武芸が達者であった。

痴漢など裸足で逃げ出す。

彼らの世界にブラックリストという物が流通しているのならば、美護は間違いなくそのトップに載せられているだろう。美貌を裏切り過ぎている戦闘能力で病院送りにされた者は、両手どころか両足の指を足しても、まだ足りない。

駆け付けたお巡りさんが思わず同情してしまう程、彼女の制裁は凄まじかった。目撃者の証言に曰く、「どっちが被害者なのかかわらなかった」と。

それを考えると、軽い背負い投げで済まされている屈睦は、運が
良い方だと言える。

あくまで、比較の上での話だが。

屈睦の、舞い散る埃と涙に彩られた世界に、鬼の形相の美護が鎮
座していた。

「男がピーピー泣くなって言っただろッ！ それでも深見の跡取
りか！」

「いぎっ！」

背中 of 痛みに喘ぐ屈睦に構いもせず、更に腕を捻り上げる。

もはや単なる暴力としか思えない彼女の「教育的指導」の前に、
文字通り擦じ伏せられ、屈睦の口から悲鳴が漏れた。

「いててててっ！ 美護っ、美護！ ストップ、ギブギブギブギ
ブ！」

「この程度で音を上げるようじゃ、テロリストには勝てねえぞ！」

「一般市民が戦う相手じゃねえし！ そもそもテロリストに出くわ
す機会もないわ！」

「バツ力野郎！ 人生いつ何時不幸が降り掛かるかわからんだろう
が！」

「うむ。まさに今、不幸が降り掛かっているな」

沈黙を守っていた壮護が、神妙な面持ちで呟く。

届睦に不幸をもたらしているのが自分の娘だということに、彼は気付いているのだろうか。

いっそ潔い程の他人行儀っぷりである。

「壮護さん、感心してないで助けて下さいよ！」

長年の経験で振り解けないことがわかり切っているので、届睦は無駄な抵抗をせず、大人しく美護の下敷きになっている。

畳に押しつけられ、腕を締め上げられている痛みで、その顔は真っ赤に染まっていた。頬に流れる涙が、何とも憐れだった。

今更ながら気の毒そうに眉を顰め、壮護が追い払うように手をヒラヒラさせた。

「退け、美護。仮にも届睦はお前の主、深見家の現当主だ」

「はあい」

気の抜けた返事をし、届睦を解放した。いかに勝気な美護でも、父親に逆らうことはできなかった。それが、一族の掟だ。

雑な手つきで、起き上がるのを手伝ってやる。

よるめきながら身体を起こす届睦越しに、美護はようやく届相の遺体を目にした。

「届睦が、現当主って……。届相さん、は？」

呆然とする彼女に、今度は届睦が視線の矢を浴びせる。苛立ち紛

れの、刺々しい矢。

「見ればわかるだろ？ 死んだよ、さつき。意味わかんねえ遺言残して」

視線と同じ鋭さの声で吐き捨てた。

「え……え……？」

届睦と届相、壮護の三者の間に、忙しく視線を彷徨わせる。

壮護は無言で頷き、届睦は依然として睨みを利かせている。届相は永遠の沈黙を守り、彼女に応えるはずはなかった。

「ご、ごめん、届睦。私、知らなくて、こんな……。ごめんなさい」

血の気の引いた顔で、震えた手を差出す。

彼を支えるつもりで出した手は、どこか縋るようであった。

届睦は、その手を思い切り払った。

「ほんと、視野狭いのな、お前」

強がってはみたものの、美護を直視できずに避けた。彼女が泣くことを知っていたからだ。

自分から突き放すように叱っておいて、こちらが遠ざかるうたとすると泣きながら引き止める。

昔から、そうだった。

喜怒哀楽が激しく入れ替わる。

ちらりと横目で窺うと、涙を溜めてはいるが、必死に耐えている。切れて血が滲みそうなくらい、強く唇を噛み締めていた。

「……美護？」

「泣かない。一番辛いのは届睦でしょ？ だから、泣かない。届睦、泣いて良いよ」

袖で涙を拭い、キツと顔を上げる。拭いた端から、涙が溜まってい。そして、また拭く。

「なに、それ？ 気遣ってんの？」

「届睦……」

「俺、同情されてんの？」

固く閉じられた届睦の拳に、涙の雫が跳ねる。

「中途半端なんだよ！

泣くなって言うなら、ちゃんと叱れよ！

何で父さんが死んだの気付かないんだよ！

遺体の横で背負い投げすんな！

俺が美護の主ってどういことなんだよ！

《シキンドウ》も《見届け屋》も《護人》も知らねえよ！

壮護さんだつてそうだよ！

父さんが死んですぐに役目がどうか言われてもわかんねえよ！」

雫が一つ弾ける度、言葉も弾けていった。

壮護も美護も、じっと眼を伏せたままで聞いていた。聞いてやる以外には、何もしてやれることはなかった。

自分たちを罵倒して、それで気が済むのなら、どんな非難でも受け入れる。

だが、二人への不満をいくつ吐き出しても、心は軽くならないだろう。

本当に言いたいことは、ただ一つだけ。

伝えたい人は、もう冷たくなっていて、伝わらない。

それでも、言わずにはいられなかった。

死に顔を覆っていたハンカチを剥ぎ取り、胸倉を掴んだ。

「アンタが一番中途半端なんだよ！ 全部説明してから逝けよ！」

「よせ、届睦！」

さすがに壮護が制止に入り、後ろから羽交い絞めにして引き離す。腕をでたらめに振り回すが、逃れることはできなかった。

自由になるのは声だけで、ありったけの音量で叫ぶ。

本当に、一番伝えたいこと。

「何でアンタまで俺を置いていくんだよ！ 息しろよバカ親父——ッ！」

04「台風娘来襲」(後書き)

ちよこっただけコメディーでした(?)

屈睦は真面目ツ子なので、どうもシリ阿斯寄りになってしまいます

(^ー^;))

これから出てくる《シキンドウ》メンバーは結構ぶっ飛んでる人々なので、もうちよっとな軽めにできるかと……?

次回、いよいよ《シキンドウ》について語られます。乞うご期待

05「葬儀での一戦」

一様に黒い服を身にまとった人々が、家の中へ吸い込まれていく。ある種異様とも見えるその光景が、ゆきぢか屈睦の眼に映されては流れていった。

ちらちらと彼を窺う目もあったが、彼はマネキン人形のように微動だにせず、立ち尽くしていた。時折吹く生温かい風が、サラサラ髪を揺らすだけである。

「屈睦」

参列者と同じく漆黒のパンツスーツに身を包んだ美護みもりが、静かに寄り添う。

だが、その声は屈睦には届かず、腕に触れられてようやくこちらを見た。

「ごめん、ボーっとしてた」

どこか、自嘲めいた笑みを浮かべる。

普段ならば周りを和ませるはずの笑顔に、今は鈍い痛みを覚えた。

「……無理して、笑うなよ?」

——こんなことを言っても無駄だとわかっているのに、どうして言葉にしてしまうのだろう。

美護は、前日の行動とも合わせて、自分に嫌悪感を抱いた。こう

いつ時こそ、いつものように厳しく叱った方が良いのか。己がすべきことを判断しかねて、何とも動けない。

「『泣くな』の次は『笑うな』かよ。めんどくせえな、美護は」

「じめん……」

彼女は返す言葉など持ち合わせておらず、それきり黙り込んだ。

髪を下ろしてくるべきだったと、今更後悔する。そうすれば、この情けない顔を見られずに済むのに、と。

美護は屈睦に背を向け、黒い人波に紛れようとした。一步踏み出した瞬間、背中に屈睦の声が弾ける。

「父さんが死んだ時のこと、気にしてんだろ」

屈相^{ゆきは}が逝^{はな}ってから今日で三日経つが、あの日以来、美護は極端に屈睦との接触を避けていた。彼でなくとも、傍から見れば誰もが気付く。

それでもハッとして、屈睦を振り返る。

軽く投げ掛けられた言葉が、彼女には信じられない程の重みを持つて響いた。

唇が細かく震え、今にも泣きそうになる。必死に堪えようとしても、涙がじわじわと視界を冒していった。

「責めるつもりは、ないんだ。っていうか、ちょっと感謝してる。

美護があそこで暴れてくれなかったら、俺、ずっとストレス溜めこむ羽目になったかもしれないから」

届睦はそう言っ、美護の頭をくしゃくしゃと撫でる。手は冷え切っ、力無かつた。ともすれば崩れてしまいそうな程、頼りない。儚げに浮かべる笑みもまた、頼りなかつた。恐らく、意識しての笑顔ではないのだろう。人生においては、笑うしかない状況というものが、確かに存在するのだ。

「ごめん、届睦。泣かないって、決めてたのに。私は《護人》だから、お前を守らなきゃならないのに。なのに、傷付けて、拳句に自分が傷ついた風に泣いて……。ごめん、最低だ、私」

黒いスーツに撥ねた涙は、彼女を彩る宝石のようだった。陽の光を浴びて、虹色に煌めく。

——こうやって大人しくしてれば、可愛いのかなあ、美護は。

意地の悪いことを考えて、フツと笑いが漏れる。

喜怒哀楽が激しい点が、美護の短所であり、長所でもあつた。それに振り回されたこともあるし、救われたことが幾度もある。今回は後者であつた。

「俺の代わりにいっぱい泣いて。俺が泣くと、きっと父さんは心配するから」

「うんっ……」

自然に。

そう、ごく自然に。無意識といっても良い。

届睦は、泣きじゃくる美護を抱き寄せた。

悲しいことに武芸や力技では彼女に及ばないが、身長は勝っていたので十分包んでやれた。

むず痒い幸福感が届睦の心に芽生えた刹那、鳩尾に鈍痛が芽生えた。

危つく胃の中身が逆流しかねない衝撃であった。

小さな小さな幸福の芽は、あつという間に枯れ果ててしまった。

原因はもちろん、「両手両足を縛りあげて、黙らせておけば美
な美護嬢の繰り出した拳である。

残念だが、届睦は彼女の四肢を拘束し忘れてしまったのだ。

「ぐふっ！」

低い呻きを吐き出して、地面に崩れ落ちる。その頭にさえ、容赦なく手刀が直撃した。

「がっ！」

「届睦てめえ何しやがるっ！ 私はお前をそんな破廉恥な野郎に育てた覚えはない！」

できることならば「お前に育てられた覚えはない」と言い返してやりたいところだが、実際、男所帯の深見家ふかみで家事を担ってくれていたのは、美護である。母代わりである彼女に、そんなことは決して言えなかった。悔しいが、ぐつと飲み込んで痛みに耐える。

「破廉恥って、別に俺は」

「文句あんのか？ 上等だ、言ってみろ！」

顔に朱を散らした美護が叫ぶ。

先程のしおらしさはどこへやら、涙もすっかり乾いていた。

「別に、美護のことそういう目で見てないし」

サラッと言つてのける。

屈睦としては「家族として見ているから」という意味だったのだが、見事に誤解を招いた。

空気が帯電し、本能的に危険を察知するも、回避が間に合わない。先の尖ったデザインのバンプスが、ガラ空きの脇腹に喰い込んだ。

「どうせ私は男女だつ！ 私が男女なら、お前は女男だ！ 湿気たツラしやがつて！ 男が情けねえ顔を見せるなっ！」

勢いで罵られている当の本人は、依然地面に這いつくばって悶えていた。脇腹クリーンヒットは、いくらなんでもキツかったらしい。もがいたせいで、喪服が白く霞がかっている。

「何やつとるんだ、馬鹿娘！」

屈睦の前に勇ましく仁王立ちしていた美護の頭上に、壮護そつごの拳骨が降り注ぐ。思わず目を背けたくなる鈍い音が、周囲に響いた。脊髄に電流が走ったような痛み。

美護も地に伏せ、二人は仲良くそろって痛みに呻いた。

そして、そろって首根っこを掴まれる。

「まったく、ここは葬儀の最中なんだぞ？　ぎゃんぎゃん騒ぐな、場をわきましろ！　屈睦も、コイツが暴走せんように抑えておけよ」

「ごめんなさい」

ぶら下げられた二匹の子猫が謝ると、壮護は彼らを家の中へ押しやった。

人目を避けるように、奥へ奥へと進んでゆく。

「壮護さん、どこ行くんですか？　戻らないと」

「葬式の方は、下っ端と葬儀屋に預けてきた。」

「下っ端？」

「うむ」

そういえば、屈相の部下らしきサラリーマン風の男たちが挨拶に来ていた。呆けていてほとんど印象に残っていないが、後で礼を言っておかなければならない。

本来ならば、式を預かるのは親族の役目だ。葬式や救急車の手配も、壮護と美護に任せっきりで、何もしていない自分が恥ずかしくなった。

せめて、労いと礼くらいは言っておかないと、と頭のメモ帳に書

き込む。

「でも、本当にどこ行くの？ まさか、お説教じゃないでしょうね」

心底めんどくさそうに問う美護を、視線で一喝する。

美護は肩を跳ね上げ、首をすくめて大人しく後に従った。

「屈睦、まだ他にスーツ持ってるか？」

彼の部屋の前で立ち止まり、壮護が尋ねる。視線が屈睦を上から下まで往復し、溜息を吐く。

「その格好じゃ、ちよつとな」

美護との一戦で、彼の喪服はまだらに白く染まっていた。故人の息子がこの格好では、確かに色々とよろしくない。

軽く汚れを払ってみたが、繊維の奥に入ってしまったて、クリーニングに出すよりほかにないようだ。

「ですね。着替えてきます」

「早くな」

頷いて自室に籠った屈睦の耳に、再び鈍い音が聞こえた。他には何も聞こえず、どうやら声も出ない程の破壊力らしい。

内心ぞつとして、屈睦は着替える手を早めた。

05「葬儀での一戦」(後書き)

《シキンドウ》についてを語る予定でしたが、色々無駄な話が入ってきて先延ばしになってしまいましたm(┐┌;)m
今日はあと二話投稿しますが、7話で少し語られます。少々お待ちを……(汗)

06「『護人』継承」

「^{ゆきちか}屈睦の着替えなら、私が付いて来ることなかったじゃない」

激痛を訴える頭を抱えながら、^{みもり}美護はささやかに抗議してみた。
^{そつし}壮護はギロリと睨みを返す。

「それだけじゃないから、お前も引つ張ってきたんだ」
「じゃあ、何があるのよ」

壮護は娘の腕を引き、部屋の前から離れた。廊下の角に隠れ、声を潜める。そのただならぬ様子に、神経がざわついた。

「何？」

「……顔合わせだ。俺は他の奴らと、客間で待ってる。屈睦と一緒に来い」

「『シキンドウ』の？ 待つて！ まだ三日しか経ってないのよ？ 早過ぎる。父さんだって、そう言ってたじゃない！」

「『集め屋』の御意志だ。従わねばなるまい？」

「あの野郎ッ……！」

苛立たしげな舌打ちと共に、吐き捨てる。

また拳骨が飛んでくると警戒したが、壮護は宿めるように肩を叩くだけだった。

悲しみの色が、瞳に映っている。

「届相がいなくなつて、俺ももう引退だ。全てを、お前に託す。今日から《護人》はお前だよ、美護。頼んだぞ」

「父さん！」

美護の呼び掛けは、悲鳴に似ていた。

狼狽と不安を両手に抱えたまま、父の腕に縋る。

壮護は一度優しく娘の頬を撫で、次いで、軽くその頬を打った。

乾いた音が、廊下に染み入る。

「しっかりしろ。《シキンドウ》と離れて育った届睦にとって、頼りはお前しかいないんだ。情けない顔するな、それでも《護人》か？」

「あ……」

「大丈夫、俺にだってできたことだ。しっかりアイツを導いてやれ。届相ゆきはらにも、頼まれただらう？」

「うん」

「一二代目へ、先代より命ずる。

三六代目《見届け屋》を、導き、己の命を賭しても護り抜け。それが、我ら《護人》の使命。

……良いな？」

うつすらと濡れた双眸が、父を見つめる。

壮護もまた、逸らすことなく娘を見つめた。

彼女の瞳に、一刻ごと決意の色が増していくのを、静かに見守る。

思い返せば、美護が息子でなかったことを恨んだ日もあった。

どんなに武芸の道を極めても、男女の間には決して埋めることのできない身体的格差がある。護衛役である《護人》には、女だということが致命的であった。

しかしそれよりも、可愛い娘の小さな手に、花や人形ではなく、竹刀や傷しか与えてやれないことが苦しかった。

武術の腕が上がっていくのに比例して、美しさを増していく美護を見るのが辛かった。

壮護の心を知ってか知らずか、美護は一度も《護人》を継ぐことに不平を漏らしはしなかった。

そして、立派に後継者として育ち、壮護の前に立っている。

美護は掴んでいた腕を放し、脇に揃えた両の拳をきつく固める。

凜と美しく立つ彼女の口からは、やはり同じ美しさを纏った声が奏でられた。

「――一代目《護人》鞍馬壮護（あまのむさとく）が一子、美護。二代目《護人》の任、謹んで承ります」

もう一度強く壮護を見、深々と礼をした。

「……うむ」

短く答え、壮護は一人客間へと足を運ぶ。

無人の廊下を渡っている内、頬に熱い物が伝うのを感じた。

中庭に面した窓からは、切り取られた青い空が見えた。

「届相、動き出したぞ」

今は亡き親友に語りかける。彼は、あの青空に辿り着いただろうか。

そうであることを願い、壮護は先を急いだ。

「何やってんの？ そんなところで」

着替えを終えて部屋から出てきた届睦の前には、廊下に正座した状態の美護がいた。

危つくドアをぶつけそうになったが、慌てたのは届睦だけで、彼女は真顔を崩さなかった。

慎重にドアを閉めて振り返ると、美護は恭しく頭を下げた。額が床に付きそうなくらい、深々と。

「え？ 土下座？」

救いを求めて左右を見回すも、壮護の姿はなかった。

「お迎えに上がりました、我が主」

平伏した彼女から発せられた声は、くぐもっていたはずだが、屈睦の耳には鮮明に届いた。

「美護……？」

屈睦の声に応えて、彼女は顔を上げる。真顔というよりは無表情に近く、彼は背中に冷たい氷が滑るのを感じた。

「何なんだよ」

「先程、父より継承致しました。

一二代目《護人》鞍馬美護、三六代目《見届け屋》深見屈睦様を、我が生涯と命を懸けてお護りすることを、ここに誓います。どうぞ、お傍に使えることをお許し下さいませ」

「はい？」

「お許しを、屈睦様」

軽く会釈をし、美護は口を閉じた。じつと屈睦の返事を待つ。

度重なる直面したことの無い事態に、屈睦の頭は混沌と化していた。

そのようなケースでは、大抵の場合、思考はトンデモナイ所に行きつくものだ。

このように。

「えっと、メイドプレイ？」

言い終わるが早いか、美護のすらりと伸びた足が、屈睦のそれを払った。

いわゆる、足払いだ。

後ろから払われて、屈睦はなす術もなく転倒した。磨き上げられた床は、ただでさえ滑りやすいのだ。派手に床を軋ませて尻もちをつく。

「いつてえー！」

「やかましいわ、このボケーン！」

続けて怒号と平手打ちが、彼を襲う。

「美護がいきなり『我が主』とか『お許し下さい』とか言うからだろー！」

「当たり前だ！ 《見届け屋》は《護人》の主！ 二十一年間大切にしてきた御役目の第一歩を、お前はーッ！」

「やめろ、死ぬー！」

「メイドプレイだと！ やっぱり破廉恥じゃないか！ 一遍死んでこい！」

届睦の防御を無視して、美護は遠慮なしに拳を叩き込む。

彼女は《護人》として、少々立派に育ち過ぎたようだ。荒ぶる闘争心が、主までをも襲ってしまっている。

この時、客間で壮護が頭を抱えていたことを、彼女は知らない。

「お前を氣遣った私が馬鹿だった！ ほら、とつとと行くぞ！」
「ぐえっ！」

ネクタイをわしづかみにし、リード代わりに引っ張った。主従逆転である。

「行ってくて、どこへ？」

これ以上転倒しないよう、必死に美護についていく。

届睦は首の自由が利かないのは、かなり不便であることを知った。生きていく上で活用される可能性が極端に低そうな知識だが。

「《シキンドウ》の奴らが、客間に来てる。顔合わせだだよ」

06「《護人》継承」（後書き）

当初の予定になかった、《護人》の引き継ぎ場面です。

《護人》に関しては、初めは存在すらなく、できてからも設定が二転三転しています（^ー^；）

でも、結果的にはこれで良かったかなと。美護の暴走は書いてて楽しいです（笑）

次回、《シキンドウ》残りの面子が出揃います。お楽しみに

07「顔合わせ」

「《シキンドウ》……」

父が亡くなってから、三日間その名前を聞くことはなかった。屈睦^{ちか}が落ち着くまでは、と壮護^{そうご}と美護^{みもり}の気遣いであった。

しかし、現実は得てして非情なものだ。傷が癒えるのを待つてはくれない。

「なあ美護、そもそも《シキンドウ》って何なんだ？」

「隠しても無駄だから、直球で言うぞ」

吐き捨てると、乱暴に屈睦を解放した。

客間が近い。

屈睦が唾を飲み下すのと、その声が聞こえたのが同時だった。

「末席の《護人》風情が、偉そうに《シキンドウ》を語るなよ」

客間の襖越しに聞こえる声は、若い男の涼しげなものだった。涼しげだが、明かなる侮蔑が込められた冷やかな言葉。

襖を貫く勢いで美護が向こうを見据え、舌打ちをした。背後に燃え上がる炎が見えそうな怒りが、彼女を包んでいる。

「これは申し訳ない、《シキンドウ》の次席たる《集め屋》殿。お待ちかね、長の御登場ですよ。

その厚い面の皮、畳にこすりつけてお迎え下さいませッ！」

言葉そのままの勢いで、襖を開く。開け放った振動が、床を通じて骨に響いた。

冷えた空気が流れる客間には、五人の人間が一行に正座していた。

声の主と思われる美青年。

制服ブレザーにツインテールのロリ系女子高生。

スーツを着崩した不良中年。

フェロモン漂う眼鏡美人。

《集め屋》と美護の、どちらに怒りを覚えていいのかわからなくなっている壮護。

ざっと届睦の第一印象を語ると、こうなる。

対応を決めかねて目を泳がせていると、不良中年がニヤニヤと人の悪い笑みを浮かべた。

「メイドプレイは終わったのか？」

「《運び屋》！」

美護が怒鳴るよりも早く、美青年が叱責する。

「へいへい」

少年のように、悪びれない表情。

年齢は届相や壮護と大して変わらないように見えるが、他人に与える印象は彼らの何倍も軽い。

「失礼しました。深見^{ふかみ}、届睦様ですね？」

「はい……」

美青年は、品定めをする目で届睦を舐めまわす。

目つきといい、口調といい、あまり仲良くはできそうにないタイプのようだ。

それがなくとも、凡人の僻みで美形には関わりたくないという意識がある。

「お初にお目にかかります、我らが長」

美青年に合わせて、一同が合わせて頭を下げる。届睦と美護も、反射的に礼をして返した。

「私は二七代目《集め屋》、賀集^{かしゅうじつた}頌。長無き間、代理を務めさせて頂いております」

と、美青年。極めて義務的な口調で、やはり好感は抱けそうになかった。

「三二代目《薬屋》、薬師^{やくし}たんぽぽです。未熟者ですが、よろしく願いますっ」

これが精いっぱいという風に、彼女は頭を下げた。
葬儀の陰湿な雰囲気^{ふくし}に飲み込まれたのかもしれない。幼さの残る顔が、緊張に縛られていた。

「三四代目《運び屋》、運利^{めくりひさひつ}永仁。この中じゃ最年長だ。よろしく長殿」

笑いの止まない不良中年が言う。メイドプレイが余程お気に入り
のようだった。

そこまでネタを引きずられては、屈睦は耳を赤くして俯くしかない。

「三五代目《代筆屋》、麻代^{ましろひつか}筆華と申します。《見届け屋》とは、
当家が一番古い付き合いですよ。よろしくお願い致します」

「お上品」を擬人化したら、彼女になるだろう。おっとりとした
知性派美人。

ようやくまともに話せそうな人間に当たって、屈睦は胸を撫で下ろした。

「美護」

壮護に手招きされ、美護は隣に並んだ。

「一二代目《護人》鞍馬美護^{くまみほ}。よろしくお願いします」

なるべく、感情を押し殺そうとしているのがわかった。

頷にも永仁にも殴り掛からなかったのだから、彼女にしては上出来だ。

「そして一代目《護人》、鞍馬壮護。これからは後見人として、長を支えることになります」

壮護の挨拶が終わると、再び一同は頭を下げた。

「……三六代目《見届け屋》、深見屈睦です。よろしく、お願いします」

戸惑いながら応えると、最初に顔を上げた頷と眼が合った。

不敵に歪めた口元が、嘲笑うような眼が語っていた。

もう逃げられないぞ、と。

訳も分ならず名乗ってしまった、三六代目《見届け屋》。

後悔しても、今更遅い。

絶対零度の微笑を湛えて、頷は手を差出した。

「ようこそ、自殺幫助組織《死近道》^{シキンドウ}へ」

——頼むぞ、届睦。

遠くに、愛しい父の声を聞いた気がした。

ここから、届睦の苦難の日々が始まる。

07「顔合わせ」（後書き）

《死近道》、メンバー全員集合です！

後に引けなくなった届睦、これからどうなるのでしょうか？

余談ですが、「シキンドウ」は私の作品にしては珍しく、携帯からアクセスして下さる方が多いです（＊＾―＾＊）一話が短いからでしょうか？

それを受けまして、改行を多くしたり、少しでも読みやすいように工夫しているつもりです（＾＾）／ そういったレイアウトに関するご意見もお待ちしております

08「命令」

あの顔合わせ以来、ゆきちか 届睦は気分が塞ぎ込んでいた。大学の無断欠席日数記録を、目下更新中である。食事もうくに口にせず、一日の大半をベッドの上で過ごしていた。

——ようこそ、自殺幫助組織《シキンドウ死近道》へ。

頌うたの言葉が、頭から離れなかった。

眼を閉じていても、開いていても、耳鳴りのようにうるさく喚きたてる。

父が自分に何を託したかったのか、まったくもってわからなかった。

——母親を自殺で失くした俺に、他人の自殺を助けると？

考えただけでも吐き気がする。もうすでに、胃の中には吐き出す物もないのだが。

それでも、内臓を鷲掴みにされているような不快感が込み上げてくる。

おまけに、頭が割れそうに痛い。

こんな状態で、悠長に教授のろくでもない講義を聴くことなどできなかった。

もう、戻れないのだろうか。

恐怖という名の冷気が、屈睦の身体を竦ませる。

単位を計算しながら、適当に通う大学。

一夜漬けで挑むテスト。

即席で書き殴るレポート。

友人たちと、馬鹿みたいな話で馬鹿みたいに笑い転げた日常。

それらは、永遠に手の届かないモノとなってしまうのか。

何故自分なのか。

何故こんなモノを背負わなければいけないのか。

虚しい問い掛けに答える声は無く、部屋に一人きり。

外から聞こえてくる子供のはしゃぐ声にさえ、苛立ちを覚えた。
同時に、そんな自分にも嫌気が差す。

屈睦の暗い気分とは真逆の、軽快なノック音が響いた。
だが、彼に応える気力は無く、数秒間の沈黙が流れる。

「美護^{みもり}、無反応じゃねえか。まさか死んでねえだろうな？」

壮護^{そうご}の物ではない中年男性の声に、屈睦は警戒心から身を起こした。ふらつく身体を辛うじて支え、ドアの向こうへ神経をやる。

「二代連続で急死とか勘弁してくれよ。香典貧乏になっちまう」

「縁起でもないこと言っな！ 言って良いことと、悪いことがあるぞ！」

聞き慣れた美護の怒声に、不本意ながら少しほっとした。慣れない引き籠り生活で、人に飢えているのかもしれない。

「冗談だよ、冗談。怒んなって。ジョークが通じないのは、親父譲りだな」

「人生丸ごと冗談みたいなくせに、その上ジョークまで言うのか。筋金入りのアホだな」

年長者に対しても、この言葉遣い。屈睦はお節介とわかりつつも、美護の将来が不安になった。

来年には社会人になるというのに、これでやっていけるのであるうか。三日と待たずにクビになるような気がする。

もっとも、美護のクビを切った相手もタダでは済まされないだろう。

場合によっては、本当に首が飛ぶかもしれない。彼女に限っては、下らない妄想だと笑って片付けられないのが怖い。

屈睦は、その日が永遠にやってこないことを神に祈った。

「おい、入るぞ」

言い切らない内にドアが開き、声の主が入ってきた。

屈睦は、咄嗟に布団にくるまって身を隠した。

髪はボサボサで、髭も剃っていない。着替えすらもろくにしておらず、ベッドに転がっていたせいでシャツには盛大に皺が付いている。

正体不明な来客に、こんな姿を晒すわけにはいかなかった。

「ん？ 寝てんのか？」

ベッドの上で布団にくるまっている人間がいれば、大抵は寝ているのだと判断される。面倒をやり過ぎそうと、その誤解を利用することにした。

が、通じなかった。

「ほれ、起きろっ！」

「うわわっ！」

猫を追い払うように、布団を掴み上げられた。抗う術もなく、屈睦は床に放り出される。

ぐらつく視界の中、見覚えのある男が呆れた顔で自分を見ていた。栄養不足の頭では、該当データ検索に時間が掛かる。

一〇秒程記憶の抽斗を漁りまくった結果、この男の正体を思い出した。

それと同時に表情が凍りつく。

「《運び屋》……」

「客が来てるのに、狸寝入りとはね。感心せんよ、大将。あと《死近道》の時以外は、その呼び方やめろ。今は『永仁^{ひさひさ}さん』、だ」

《死近道》という言葉に反応して、屈睦の肩が跳ね上がる。足元から、無意識に震えが這ってきた。

「何ビビってんだ？」

「お前が、いきなり入ってくるからだろ！」

眉を顰める永仁の前に、美護が立ちはだかる。

背には屈睦を庇い、完全に「悪党から姫を守る騎士」の構図であった。惜しむべきは、姫と騎士の性別が逆転していることであろうか。

「美護い、もうちょっと口のきき方を覚えた方が良いな」

全く頭にきた様子もなく、永仁はニヤニヤと笑う。その裏にある意図は、読み取ることができなかった。

一方、正面に立つ美護は完全に頭にきている様子で、彼の言葉に睨みを返す。

「私は《護人》だ。主に害を為す全てから、護る義務がある」

「ほーほー、お仲間を害扱いするわけかい」

そうだ、と彼女の口が開きかけた刹那、永仁の手が美護の額に掛かる。

ちょうど、子供の熱を測ってやっているような仕種で、屈睦と美護は揃って目を丸くした。

「何をッ……」

「控えよ」

永仁が、同じ人間だと思えない程威厳に満ちた声で告げる。

傍から見えていた屈睦には知りえないことだが、この時、美護の身体は自由を失くしていた。ただ、大きな瞳を見開いて、眼前の「害」を凝視する。

我が身に何が起きたのかはわからなかったが、その原因が永仁にあるということだけは理解できた。

自由を失った恐怖よりも、屈辱に彩られた怒りが沸き起こってくる。

「何だコレ……お前、何をした！」

「美護は初体験だから上手くいくか心配だったが、どうやら大丈夫そうだ。良かったな、お前はちゃんと《護人》の子だ」

永仁が手を離れた後も、美護の身体は依然動かないままだった。

またヘラヘラと笑い、彼女の怒りを煽るように髪をぐしゃぐしゃ掻きまわす。しなやかな黒髪が乱れて顔に落ちかかるが、それを払うこともできない。

「大将、良いモノ見せてやるよ」

屈睦に向かって、軽く笑みを投げた。完全に蚊帳の外に置かれた屈睦は、呆然と二人の行く末を見守る。

永仁は美護の視線をしっかりと捕え、憐みの色を浮かべる。奇妙に歪められた唇が、謝罪の言葉を紡いだ気がした。

しかし、実際に声となって現れたのは、無慈悲な命令であった。

「跪け」

普段の彼女ならば、相手を秒殺している。

屈睦はその光景を想像して、思わず目を瞑った。壮護までとはいかないが、それなりの体格をした永仁でも、美護相手では無傷ではられないだろう。

それ程までに、屈睦は美護の戦闘能力を評価していた。したくもない評価だったが。

派手な破壊音が聞こえるものと覚悟していた聴覚に触れたのは、僅かな衣擦れの音だけだった。

静かに目を開けると、驚愕の光景がそこにある。

永仁の命令通り、美護は彼の前に跪いていた。

08「命令」（後書き）

久々の更新です（^^）／

不良中年、永仁さん来襲。

基本的に、不真面目で適当なオッサン。何かヘラヘラしてるけど、要領良く世渡りしちゃってる感じの（＝||＝）

オッサンなので、若者に絡むのが大好きです（笑）

迷惑なオヤジですが、一応年長者ということで保護者的な暖かい人物として設定されています……。されているハズです……。

09「猫と虎とじゃ大違い」

「美護……？」

主の呼び掛けにも応えず、美護は頭を垂れていた。
怒りからか、羞恥からか、顔が真っ赤に染まっている。

それが、彼女の意味で跪いているのではないという証拠だった。

「永仁さん、何をしたんですか？」

ただならぬ事態に、声が上ずる。

催眠術？

気功？

手品？

様々な選択肢が駆け巡ったが、永仁の答えはどれでもなかった。
苦笑とも自嘲ともつかない表情で、ゆきちか 届睦に目をやる。

「《命令》だよ」

「《命令》？」

「《死近道》シキンドウの直系血族にのみ与えられた力……でもないか……。何て言うんだろうな。鎖？」

下っ端は、上の《命令》に絶対服従。何があっても逆らえない。

組織を保つために嵌められた、絶対に外れない首輪みたいなモンだよ」

ポンポンと、美護の頭を叩く。髪に隠れていて窺うことはできないが、両眼には怒りの炎が滾っていることだろう。

「頌坊も言ってたが、《護人》は《死近道》の末席——一番下っ端。誰の《命令》にも逆らえない。俺にも、もちろん主である大将にもな。」

試してみるか？」

届睦は恐怖に首を横へ振りかけたが、思い直して縦に振る。

永仁は、意外そうに眉を上げた。彼なら断ると思っていたのだ。

届睦には、美護を服従させる気は毛頭ない。彼女は自分にとって、姉であり母である。

確かに、美護の破天荒癖が治るのならば魅力的だが、それでは彼女自身を否定することになってしまう。いくら振り回されても、自由奔放な美護を見ていたかった。

その為に、届睦が今下すべき《命令》は一つ。

「『従え』って、心の中で強く念じる。それで、《命令》を言葉にすりゃあ良い」

「わかりました」

立ち上がり、服従の姿勢を崩さない美護の前に回る。前髪からチラリと見えた両眼には、明かなる怒りが見て取れた。

これから起こる惨事を思うと気が滅入るが、解放してやらなければ怒りの矛先は自分へと向かってくるのだ。

弱り切った身体で彼女の攻撃を喰らったら、間違いなく黄泉へ旅立つことができる。

貧血でふらつく身体を気力で制して、強く念じた。

——今、助けるからな。

想いの強さが声の大きさに表れて、本人も驚く程の音量で《命令》が下された。

「俺以外の《命令》に従うなっ！」

「なッ……！」

永仁が口を挟む隙もなく《命令》は執行され、美護は身体を取り戻した。

云わば、暴れ馬の縄が外れてしまったようなもので。

バネ仕掛けのおもちやの如く立ち上がると、猛々しい叫びと共に、ご自慢の右ストレートを繰り出す。

「うるああーっ！」

——そうだ、美護は格闘家になったら良い。

届睦が将来の解決策を幸せそうに掴んだ所で、美護の拳は正確に敵の下顎を捕えた。

漫画のワンシーンのように永仁が宙を舞い、クローゼットに突っ込む。

いつそ気持ちの良い破壊音が鼓膜を乱打した。クローゼットの上に置かれていた箱やらファイルやらが、次々と永仁に降り注いでは床に散っていく。

永仁を吹き飛ばした勢いそのままに、美護が思い切り届睦の方へ向き直る。びしつと差し出された指先から何か飛んでくるのではないかと本気で警戒し、彼は咄嗟に身を竦めた。

「よくやった届睦！ 褒めて遣わす！」

「いや主は俺だし！」

「じゃあ《命令》しろ！ 『俺の主は美護様です』だ！」

「この前俺に忠誠誓ったの誰だよ！ 意味わからん！」

「下剋上じゃボケーン！」

「はああ！？」

「どうおらー！ クソガキーンツ！」

箱とファイルの海に溺れていた永仁が、突如噴火した。

「どうおらー」の意味する所は不明だが、恐らく本人もわかっていないのだろう。心からの叫びとは、そういうものだ。

永仁が立ち上がったのに伴い、彼の上に被さっていた品々が更に散乱する。

その内のいくつかが二人を襲ってきたが、怒髪天の騎士は見事に衰弱の姫君を護ってみせた。

「平成生まれのジャリが！ なめんなよ！ 昭和の恐ろしさを見せてくれるわ！」

後ろに撫でつけてあった髪を振り乱し、額には青筋が浮いていた。鬼気迫る表情。吐いている台詞はどこか間が抜けて聞こえたが。

気迫に押されて引きつる屈睦を余所に、美護は好戦的な笑みで迎え撃つ。

「ふん、バブルに片足突っ込んだままのアナログ野郎が！ できるもんならやってみやがれエロオヤジ！」

「上等だ、子娘が！ 躑直してやらあ！」

「部屋が壊れる……」

頭を抱える家主を完全に視界の外へ押し出し、すでに何が目的なのかよく分からなくなっている戦いが始まった。

腕が、脚が、空を切り、アクション映画張りの殺陣が繰り広げられる。

屈睦は身の安全を確保しようと、元いたベッドの上へと這い上がる。壁際に身を寄せ、布団に包まりながらショーを見物した。

……この頃、深見家のお隣に住む老夫婦の間では「届睦ちゃん、元気になったようで良かったねえ」と、何とも暖かい会話がなされていた。

耳の遠くなったお二人には、昭和オヤジと平成子娘の大乱闘が、猫のじゃれあい程度にしか聞こえないのだった。

知らないとは、幸福なことなのだ。

09「猫と虎とじゃ大違い」(後書き)

サブタイトルの由来は、老夫婦の段落より。

同じネコ科なんですけどね(〃^・^〃) 家猫と猛虎を一緒にしちゃういかんですよ。

ブチ切れモードの永仁さんが口走った「ジャリ」ですが、「ガキ」と同語です。参考までに。

決まてきれいな言葉ではないので、使わないようにして下さいね。特に女性の方、ダメですよ。知らなくて良いくらいです。

……ってアレ？ 私の性別は確か……？(・ー・;))

今日はあと一話更新です。いつものパターンです

10「お迎え」

双方の息が上がりだし、部屋が震度ハレベルに見舞われた体を醸し出した頃、ゆきちか届睦にとっての救世主が現れた。

戦士達にとっては、無粋な邪魔者であつたが。

「《運び屋》、《護人》、やめなさい！」

よく通る甲高いソプラノ。

その声に反応して動きを止めたのは永仁ひさひとのみで、みもり美護の回し蹴りは遠慮ながら空きになった脇腹を直撃した。形容しがたい、重い音が響く。

「おふっ！」

「えっ！　嘘！？　何で止まらないのお！？」

「あらあら。永仁、大丈夫かしら。もう若くないのに無理するからよ」

《命令》が下されたことを悟った届睦が視線を向けた先には、大小二人の女性の姿があつた。

眼鏡美人と、ロリ系女子高生。

もとい、《代筆屋》と《薬屋》だ。

美護が不用心にも鍵をかけ忘れたのだろう。平然と侵入を果たしている。

「何だ、揃ってぞろぞろと」

お楽しみを邪魔されて不機嫌な美護が、眼光で一喝する。
たんぽぽは怯えて筆華の背後へ避難したが、筆華自身はやんわりと上品な笑みを返す。

「いけませんよ、美護。仲間同士で争っては。我らが長も、大層怯えておいでのようですし、ねえ？」

「はあ、まあ、その……」

同意を求められても困る。屈睦は顔を赤くして、口ごもった。

「永仁、あなたもいけません。長のお迎えを頼んだのに、ちっとも帰ってこないじゃないですか。心配になって見に来てみれば……もう」

腰に手を当てて溜息を吐く仕種も、また優美であった。

おつとりと諭す姿は、幼いたんぽばを背にして母のようであった。しかし、今諭している相手は、彼女の子供と言うには少々年齢が行き過ぎている。

「面目ない」

四〇年前は子供だったオッサンは、ばつが悪そうに頭を掻いた。

そこにたんぽばが、無邪気に追い打ちをかける。

「永仁さんてば、普段から大人気なおとなげさげ過ぎなのに、こんな暴れるなんてホントに大人気ないんですね。有り得ない有り得ないですよ」

「何だと、ぽんぽこ」

永仁は、度々「ぽんぽこ」と言って彼女をからかった。

「たんぽば」と響きが似ているからという理由だが、年頃の女の子が喜ぶはずもない。

「次ソレ言ったら、硫酸ぶっかけてドロドロシェイクにしちやいますからね」

無邪気な笑顔を保ったままでも、彼女からは確かな殺気が滲んでいた。むしろ、笑顔が残忍さを引き立たせている。

「お迎え、って言いましたね。どういうことですか？」

《死近道》^{シキントウ}で唯一まともに話ができそうな相手——筆華に問いかけた。何とか、この混沌とした空気を抜け出したい意図もある。

届睦の心中を知ってか知らずか、彼女はにっこりと微笑んだ。

見ているだけで和む暖かさ。この荒廃した部屋の中では、尚更だった。

戦場に舞い降りた女神、といった所か。

「はい、お迎えに上がりました。我ら《死近道》の城、自殺者養護施設《紫堇堂》^{シキントウ}へご案内致します」

女神に見えたのも束の間、彼女が死神に見えた。

10「お迎え」(後書き)

本日二話目です。

筆華とたんぽぽ登場(^^)ノ

筆華は、ひたすらおっとり美人さん。虫も殺さないような顔して、笑顔で殺しちゃうタイプです(笑) 《死近道》のお母さんの存在で、何気に最強。

たんぽぽは、ブラック少女。基本キャツキャした感じのテンションで、軽くウザいです(笑) 語尾に記号付いちゃったりして。作者オナナコ好き(妙な性癖はありません)なので、割とお気に入りのキャラだったりします(*^^)v

次回、《紫堇堂》に舞台が移ります。
乞うご期待

「みてみん」に「シキンドウ」のイメージイラストをアップしました！

かなり拙い出来栄ですが、よろしければ覗いてみて下さい>(「

ー) <

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8096j/>

シキンドウ

2010年10月8日21時17分発行